源とするといふ妙法蓮華經の功德利益だ、これは法を知り國を思ふの志、早く天下の賞讃を博すべきが當り前であるのに、權敎權宗の徒輩が間にはいつて、讒言讒奏して隔てるが故に、久しく大忠をいだいて未だ微望を達せず、この知法思國の志、法を知るが故に國を思ふ、この中心は正である、そこで正を立てるといふ、國を思ふの結果、その國を安泰ならしむる行動をおこしてゆくから安國となる、知法思國の故に立正安國する、即ち正法を立つて國家を安んずることは、法を思ひ國を重んずるといふ上から發したものである。

◇

その標的を「事の三大事」といふ、それは佛の慈悲からあらはれた、大聖人が慈悲をつみ、又佛の智慧が大聖人の智慧を通じて、そして我等の頭上に下された、この好き良藥それが世法と佛法と感應しなければならぬ、この世法は即ち王法である、世を治める道は政治であつて、人に臨んで各々その處を得せしむるといふ任務をはたすのが世を治める道である、であるから王法とも王道ともいふ、王法だ、その王法の中に魂を入れるのが佛法だ、王法は國の方だ、佛法は法の方だ、この法と國とが一致しなければ佛法も國家も、どつちも何んにもならないものになる、三大事の法門はたゞ高閣につかねて、一つの高遠な理想であるとか、神秘な敎であるとかいふて、深く佛壇の中に閉ぢこめて、經陀羅尼を讀んで藏つてをるといふのでは、何の用にも立たない、佛壇の佛法ではいけない、家庭の佛法ではいかぬ、お寺の佛法でもいけない、國家の佛法でなければならない、お寺はそれの練習所、佛壇はそれの練習所である、佛壇に向つて南無妙法蓮華經と唱へてゐるのは調練である、調練は實際の用に立つやうに調練する、兵士が練兵してゐるが、いざ戰爭となる時には、それは違ふから戰爭に出ないといふのでは何にもならない、畢竟實戰の時のためである、戰はゞ必ず勝つ、征むれば必ず獲るといふ爲に强行演習などをやつて、兵隊さん達が練習してをる、練兵だけはするが、本當の戰ひはしないといふのでは何にもならない、佛壇に向つて經を讀み題目は唱へるが、世の中に活用することは御免蒙るでは死んだ佛法だ。

金箔莊嚴の中に佛をまつり込んで、信は莊嚴より起るといつて有がたさうに見せても、その佛が生きた人生の用にたゝなければ金箔の化物だ、寺院もまた實世間の上に佛法を活用する敎を垂れないで、沒交渉で、檀家が死んだらば死んだ後から寢言のやうなお經を聞かして成佛が出來ると考へたら大違ひだ、死んでしまつたものは仕樣がないんだ、勘定がすんだのだ、大晦日まで無精してしまつたから身代限りをしたのだ、それは再び出直さなければならぬ、大抵今日の人間は勘定が出來ないで破産の宣告を受けて死んでしまふやうなものだ、其奴に棺桶の上から世迷言の

やうなことを聞かして、『今や汝に悟道の要句を示さん』といつても何にもならない。

◇

死んだ佛法では可けない、お寺の佛法、佛壇の佛法では可けない、そのお寺において經題目を唱へる譯は、實世間に向つてこれを普及し及び實效をあげる稽古をしてをるのだ、さういふ考へでなければならぬ、佛樣に向つてお經を讀んで、法華宗のものはお經をたんと讀むものが偉いと思つて、昔の信者は挨拶もシヤガレ聲でやるやうなものもいくらもあつた、そんなにお經を讀んでもそれは餘計なことなのだ、自分の練磨でない限りは餘計なことだ、佛樣にお經を聞かしても如來は喜ぶわけではない、佛樣の方がお經の本家だ、それも隨分間違つたお經を平氣で讀んでゐる、南無妙法蓮華經の七字でも音律を整へてやるものは少い、お經なんて來たら隨分甚しいのがある、『諸佛百年如是千年』なんてやるものがある、そんなまやかしを聞かされる佛樣はいゝ面の皮だ、『また如是千年の經』かといふ、經には佛が『爾時ニ我汝等ニ告グ』とある、その經は何だ、自らこれを讀みこれを行じて世を救ふ、その爲に俺が說いて殘したのである、俺の方に聞かしてくれろといふのではない、といふ結論になつて來て、それが王法と佛法とのすれ〳〵になつた原因である。

◇

世法と佛法とがすれ〳〵になつた、信仰は信仰で別の仕事になつた、『信心は得の餘り』なんといふが、世の中で儲けてその糟があつたら、少しは佛法のことに出さうといふ、けしからんことだ、自分の身體全體が法のものでなければならぬ、骨も血も法のものでなければならぬ、況んや財產をや、一財合財皆法のもの、道のものとなつて始めて活きる、資本家は資本を得んが爲に勞働者を虐使して、己を肥さうとするから搾取階級と云はれる、これは惡道に墮ちてゐる、『小人罪なし玉を抱いて罪あり』、金があるから金の欲に目がくれてさういふ間違つた考へを起す、自分だけ間違つてをれば未だよいが世に害を流す、金持が己が富を得やうとする爲に世が混亂する、銀行にしても人民の金を預つて、その金を運轉して相當の高い利を取つて用を足すといふ、それも宜からうが、人の金を預る以上何んなに堅い保證を以てもその確實を保たなければならぬ、ところが法律の不完全にもよるが、大體は人間の頭が間違つてゐる、慾の根性が突つ張つてゐるからその金を私するやうなことになる、自分が儲けやうと思ふ商賣に利用する、そこで損をする、取付となる、金が足らなければどうにもならないから鐵の扉を閉めて休業する、掛け合ふところがない、整理中休業といつて鐵の戸を下して、ほんの申譯に印刷したもので、甚だお氣の毒である

がといふやうなことをいつてよこす、それで五箇月もかゝつたあげく利息は拂はない、汗を流して貯めた多くの人の錢を預つて、無斷で私用して利息も拂はないなんていふのが、長きに亘つて國の經濟に影響し、とゞのつまり國家にまで迷惑をかけて、何億といふ辨償金を國家から持ち出させる、そして國家の經濟は攪亂される、それ等の懐中で角力をとつてゐる重役は、多分な給料をとつて、遲く出て早く歸つて髯を撫でながらシガーをくゆらしてゐるが、下級のものは一生懸命に働いてゐる、然るに重役等はたんと報酬を受けて、たんとボーナスをもらつてゐる所謂大株主には、その上配當金を拂ふ、かういふ不合理な組織によつて天下の財を無駄にしてをる。

◇

一軒々々の銀行に頭取があり、職員があり、一軒々々づゝに大きな建物をたてゝ電氣がついてゐる、莫大な費用がかゝつてその結果が人民に不便を與へる、どうかすると數ケ月も休業に休業を重ねて利息を拂はないどころか、もみにもんで何うなるかといふと六割で勘辨してくれ、半分で勘辨してくれといふ、つまり人の錢を只取る欺瞞の行動だ、さういふ專賣特許の欺瞞の行動が天下にあつて、そして又金を預けに行く奴が仕方がないといつて泣寢入りをしてゐる、これは情ない話だ、かういふ國家經濟の惱みの根元をなすものを放つたらかしておいて、それで經濟國難もあつたものではない、これ卽ち高所から大觀して平等にものを見、秩序的にものを整理する能力がないから、かういふ國家の累ひが出來る、これは法華經にそむいた現罰だ。

法華經には銀行のことは書いてないが、法華經の原則を以て見れば一視同仁、公明正大でものを捌いでいかなければならぬ、佛眼を以て觀察する、佛の眼をかりて國家を照すと大聖人は仰ツしやつた佛の眼を以て見る時は、そんなだらしのないものではない、久遠實成の大生命をもつた宇宙の法則にそむいたものは皆邪法である、正しく見る、慈眼を以て衆生を視る『慈ノ眼ヲモツテ衆生ヲ視レバ福聚ノ海無量ナリ』である、慈悲の心をはなれた眼から見、經濟萬能の考へで國家を見たら可けない、經濟といふのは本當は慈悲の實行である、それが法華經の見である、卽ち慈眼を以て衆生を見る、自分にはわからないが法華經の正義を通して見ると、底の底まで見える、肉眼では見えないがレントゲンで見れば腹の中まで見える、佛眼の光線を以て世間を見る、それの正しきものをば王法といふ。

◇

次には差別と平等だ。

一

これは横に見た十界、社會といふ、これは一本棒を横に引いてある、これを社會と見る、さうするとこれは左端から右端までこの線はつながつて居るから平等と見られる、劃一するといふ平等である、隔てがないといふことだ、ところで又この一本の線をかう觀察すれば平等で一つになるが、此方の端と此方の端があると考へる、さうすると違つて來る、左端と右端とある、右端はこれ左端に非ず、左端はこれ右端に非ず、右と左と違ふ、即ち左右といふ二つの差別がある、さうすると右に非ず左に非ざるものがまん中である、左端と右端とのまん中がまた出來る、かう見て行くと差別だ、差別のものと平等のものと二つあるのではない、一つのものが見やうによると差別となり、見やうによると平等となる、どう見るのが本當かといふと、兩方見るのが本當だ。

階級といふものはないものである、階級をなくなさねばならぬといふのは、平等だけを見て差別を見ないのだ、差別は秩序である、差別を厭ふが爲めに大切な秩序までも破壞してしまふ、これは差別を忘れた平等、片輪な平等だ、それから差別ばかりを見て、秩序を誤解して差別と見、その本體本性に於て同一體のものであるといふことを忘れて、別々に考へるのはこれは悪差別である、即ち差別を忘れた平等を悪平等といひ、平等を忘れた差別を悪差別といふ。

◇

一本の線に右と左のあるのは階級だ、この一本の線を二つに割る、更にまた二つに割る、それは階級だ、少くとも右と左とまん中といふ階級がある、平等の一つの線の中に階級がある、人間の身は一つだけれども一つだけでは埒があかない、いろんな階級があつて出來てゐる、階級の固まりが身體だ、頭とか手とか足とか、五臟六腑なんてものもある、醫學が進歩すると又いろんなものが增えて來る、人間の五體が悉く階級だ、顏の中でも口があり鼻があり耳が兩方についてゐる、目が兩方にあつて中心を保つ、これがまん中にあつたら見當がつかない、いゝ鹽梅に左右に二つある、耳も其の通り、口は二つあると食ひ過ぎるから一つだ、それも階級だ、この階級を打破すれば階級闘爭だ、目と鼻と喧嘩しろ、手と足と喧嘩しろとなつたら大變だ、それを階級あれば闘爭ありと考へたのは、如何にもいけぞんざいだ、階級あればあるほどその主體に集つて、一身體が榮えてゆく、だから階級叛逆するといふことはいけない。

◇

そこでその階級にとらはれて、佛は佛我々は我々と別々だと考へては可けないから『空諦』といふ、それは平等だ、平等を認めないと可けないから空諦といふ法門を說いた、即ち差別と平等と離れたらどつちも死ぬから、平等に即して差別、差別に即して平等、その差別平等の中心を押

へるといふことになつて、まん中を中道といふ、これが法華經だ、中道王三昧だ、中といふことは妙といふことゝ同じだ、中は程のいゝといふ事だ、空に非ず假に非ず、差別に非ず平等に非ず、それを押へてよき差別とし、よき平等とする、何ともいへない如何にも程のいゝといふ事を中といふ、だから妙に通ふ、元政上人の詩に

『言レ假則違フ、説レ眞未レ合、若シ問ニ云何ト、笑而テ不レ答』

中といふ法門ほど玄妙不可思議なものはない、妙の極致である、然しながら特にこれを中道として別段に中の法門を立てようとすると、又離れ〴〵になつてしまつて用をなさない、それでは何うすればよいかといへば、そこは言ふに言はれない呼吸である、『若し如何と問はゞ笑つて答へず』これを釋尊は『止ミナン止ミナン説クベカラズ、我ガ法ハ妙ニシテ思ヒ難シ』といはれた。

◇

そこでこの間いつた妙の字だ、女扁に少いといふのは、ごく無垢の少女の、しかも子供をはなれたところ、大人にならない少女の如何にも神々しい、そして如何にも愛嬌のしたゝる、そのかほよく程のよい、言ふに言はれない甘味のあるものだといふので、この妙の字は女扁に少いと書くんだ、だからこれは少女に限る、この少女のかほよく如何にも溫然珠の如き、而して氣品のある行爲所作といふのは、口に出していへない、古人が、

妙の字は少い女のもつれ髪いふにいはれず解くにとかれず

と狂歌を詠んだものがある、女の髪が結ふに結はれず解くに解かれずといつても、この頃の者はいろ〳〵美容術や美顏術があつて頭の形もさま〴〵につくるから解けるといふかも知れないが、若き女のもつれ髪といふのは、房々とある髪がもつれると解けないといふことを借りて來たのである、いふにいはれないところである、そのいふにいはれない、とくにとかれない妙、不言の中にあり、何ともいへないといふ、何ともいへないといふことは、わからなくて言へないのではない、これを言ひ解くには餘りに淺薄となる、言ふべく餘りに嚴肅である、

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ

といふのは、これはいはゆる嚴肅味をいふたものだ。

それを中といふ、中は程のいゝといふことだ、『君子ハ中庸、小人ハ中庸ニ反ス』といつてあるけれども、世間でいふ中といふことは中庸といふ、『偏ナラザルコレヲ中トイヒ、易ラザルコレヲ庸トイフ』、偏らないことを中といふ、これは中正といつたやうなことだ、けれども佛法の中は偏らないばかりではない、兩方を一緒にする、そして否定する代りに兩方を用ゐる、用ゐてそれが

一つの活躍をすゝめて行く、この中が上から貫いて居る、一體中の字は口が横にあつてそのまん中を貫いたものだ、差別平等の兩端に立つて、巧みにこれを使ふものは中である、妙である、それは何處から支配するか、これには何かその兩端を統一するところの主力がなければならぬ、その主力は卽ち佛である、佛法である、その佛法の相手方は現實だ、それがまつすぐに上から――を引いて來て中となる、これは世間法だけでいへば上は天だ、下は現實の地上の地だ、これを操縱して行くものは人間だ、人間だからまん中は人間だ、人間といつて間の字を書く、『あいだ』といふ字を書く、これは兩方の間といふことで交はることだ、善と惡と交はり、迷と悟との會流點となる、そこで人間といふ、佛法は人間中心のものである、佛といつても人間の顏をして居る、地獄でも餓鬼でも、あらゆる鬼界の者でも、佛の會座には人間の姿をして出て居るといふのは、それは人間中心の證據だ。

◇

その人間の心の中に惡い心と善い心とある、それを振り分けて地獄と佛とし、その間を分つて十界となつたがそのまん中が人間で人間本位だ、であるから人間と天地とそれから現實の物質、これが一つになつて連絡して働かなければ何にもならない、その天の理卽ち本佛の道理が地上に現はれてすべての物質の上に通じて來る、それは人間を通じて接して來る、人間を經て通じて來る、汽車汽船飛行機ラジオでも、あらゆる地上の發明でも、皆人間の智慧科學の結果として現はれたから、人間の智慧によらなければならぬ、然しながらそこに人間の慈悲を濾過して來なければ可けない、そこで天と地と人間との三つを完全に統一する中心は人だ、上を天とし下を地としその天地のまん中を人間とする、この天地人の三才を一貫して眞理を說かれてあつて正義の力を以てこれを維持して行くといふ中心點が王道である、それが世を治めるところの王道であるといふので、王の字を天地人の三才を貫くといふ。

大聖人はよく王の字の三の棒は天地人の三才であつて、縱の一本の棒は天から地に通るところの君である、國王である、卽ち天の心を體して人間を通じて地上の萬物を活かすところの役目を持つたものが國王である、これを王道といふ、その世間法の王道に通ずるところの本は久遠本佛の悟の境界である、久遠本佛の功德慈悲それは妙法正義である、三大秘法の上に現はれた妙法正義であるから、その君も人民もことごとくこの三大秘法を持つやうにならなければ、本當の天下太平は來らないとある、

『王臣一同ニ三秘密ノ法ヲ持チテ有德王覺德比丘ノ其乃往ヲ末法濁惡ノ未來ニ移サン時』

その時に、はじめて眞の金剛不壞の國土は成就するのである。

◇

今、御本尊を拜すると、上は佛界から下は地獄界まで悉くの階級が條然として列なつて居る、そして

『序品列坐ノ二界八番ノ雜衆等、一人モ漏レズ此御本尊ノ中ニ住シ給ヒ』

とある、法華經の序品にはいろ〳〵な種類の者があげてある、その法華經の會座に集まるあらゆるものそれを二界八番の雜衆といふ、それが下地獄界の提婆に至るまでもあげてある、これらが皆法華經によつて成佛した手本としてある、そして

『序品列坐ノ二界八番ノ雜衆等、一人モ漏レズ此御本尊ノ中ニ住シ給ヒ、妙法五字ノ光明ニ照ラサレテ本有ノ尊形トナル、コレヲ本尊トハ申スナリ』

即ち中央の南無妙法蓮華經の五字の光明に照らされて――日蓮聖人の書かれた題目は皆左右に棒がはねてあつて、これを光明點といふ、これは日蓮聖人の新發明でしたのでなく王右軍の百態の筆法の中にある、その光明點の一格を曼荼羅の書式にお用ゐになつた、その意味は上佛界から下地獄界に至るまで即ち世法佛法の一切を貫いて南無妙法蓮華經の光明に照らされて妙法化してしまふといふことだ、それは

『天晴レヌレバ地明ラカナリ、法華ヲ識ルモノハ世法ヲ得ベキカ』

であるから、

『法ヲ知リ國ヲ思フノ志尤モ賞セラルベキノ處、邪法邪教ノ輩讒奏讒言スルノ間、久シク大忠ヲ懷イテ未ダ微望ヲ達セズ』

とある、その久しく大忠を懷いて

『賢王聖主ノ御世ナラバ、日本第一ノ權狀ニモ行ハレ、現身ニ大師號モアルベシ』

と仰しやつた、これを周章者は日蓮聖人が大師號を欲しがつてゐたといふやうに考へる。

◇

『法華經ヲステ、觀經等ニツイテ後生ヲ期セヨ、父母ノ頸ヲ刎ネン、念佛申サズバ、ナンドノ種々ノ大難出來ストモ、智者ニ我義破ラレズバ用ヰジトナリ』

法華經を捨てゝ念佛を唱へろ、若しさうでなかつたら親の頸を斬るぞ等と、かういつておどかされてもすかされても、俺は斷じて法華經は捨てない、題目は止めない、『智者ニ我義破ラレズバ用ヰジトナリ』、若し日蓮所立の道理をば道理文證現證の上から破る者があれば兜をぬぐが、さう

でない限りはなんといつても動かない、貴樣が自分の頸を斬られることは何でもないと思ふだらうが、親の頸を斬るとなつたら何うする、それでも捨てない、

『ソノ外ノ大難風ノ前ノ塵ナルベシ』

子として親の頸を斬られるといふ忍び難いことでも忍ぶ、死罪でも流罪でもビクとも思はない、風の前の塵のやうに思つてゐる、この偉大なる無限の誓願力によつて世を救ひ國を救はうとされた立正安國の大導師、何で大師號がほしいなんてことがあらう、然し世間の方からいつたら、このくらゐに世を救ひ國を救はうとしてゐるから、俺が存生の中に大師號でも差上げますと政府がいつて然るべきであると仰しやつた、けれども大師號はさておいて日蓮聖人を罪人扱ひにし、法敵だ國賊だとまでいつた。

◇

それから日蓮主義者が代々の幕府から迫害をうけたことは何のくらゐだか知れない、幕府は禁令を出して貴族に日蓮宗を信じさせない法令迄も出した、信長の如きは身延を始め京都十六本山を破却するといふこと迄もいひ、京都から近江にかけて何の位寺を潰したか知れない、近くは德川の時代に至つても、純正なる日蓮主義者を迫害することは止まず、感應寺、碑文谷の法華寺、小湊の誕生寺等まで手を入れた、その中でも谷中の感應寺は末寺が五百軒もあつたが悉く破却した、のち家齊が再興して鼠山に建てたが、その感應寺までも潰した、これは水野越前が政治的に破却したといへるが、それは矢張り法華宗に對する迫害の義分があつた、年中そんなことをして居た、それが、明治時代に至つて先づ政教の分離といふことになつた、政治と宗教とは全然離れた、だから政府が宗教に干渉しないから政府と衝突しない、それから信教の自由を許した、臣民たるの義務にそむかず國家の治安を害せざる範圍に於て信教の自由を許された、さうすると日蓮聖人の主張は公然と宣傳してよい、今まで日蓮主義の本はモグリのやうにして弘まつた、表向きになると止められてゐた、表向きに現はれてゐるのはごく迎合的妥協的な部分だけであつた、眞の日蓮主義の本は一切發行禁止であつた、ところが　明治天皇が信教の自由を以て日蓮聖人の立場、日蓮聖人の信仰主張を公然と認められた、國家と宗教と背馳しないといふ消極的準備が出來た、卽ち　明治天皇によつて日蓮聖人の立教ははじめて國家から解放された。

◇

それから　大正天皇の時に大聖人の一代の洪業を讃歎して立正大師といふ大師號を下された、御歸依の上で下されたのではないが、國家としてこれを認めなければならんといふ、國家の代表

者として立正の名をもつて大師號を下された、はじめて國家がこの自覺の下に日蓮聖人の立正に承認を與へた、承認を與へられたからといつても與へられないからといつても、此方に增減はないが、國家としては進歩だ、ところが今度　今上天皇に至つて立正の二字の勅筆を染められて勅額を下さることになつた、これがこの十月一日に宮中から下つて、そして即日池上本門寺に於て拜戴式を行ひ、その晩すぐ別仕立の汽車をもつて勅額のお供をして有志者が身延に御隨行中上げる、その翌朝未明に身延に着いて、十月二日に身延の御廟に勅筆を奉つて、そして　陛下の思召をもつて立正の二大文字の御宸筆を染められたことを大聖人の御廟に報告祭を行ふ、それから直ちに大式典を身延の大殿に於て行ふ豫定になつてゐる、今度はわが國柱會もとの勅額の奉迎には祝意を表して參加することになつてゐる、その次第方法については、昨夜國柱會大會に於て滿場一致で可決されたが、委員をあげてその方法を議することになつてゐる、何しろ大多數の人であるから制限を加へないと可けないといふので、約五百人限り國柱會々員及び會員の同伴參加の人を募集しようと思ふ、そして別仕立の汽車を以て二日の午前の大式典に參加し大舞樂を國柱會からやる、そしてその晩久遠寺本院に於て約二千の參拜者の爲に晝夜講演及び舞樂藝術傳道等の大演奏を以て紀念大宣傳を行ふといふことだけは昨日きまつた、諸君の中で是れに參加したいといふ方は幹事の方までお申込になれば、その仲間に加へて空前の式典に參列することが出來る。

先づ宗門開けてはじめてだ、　天子樣が御躬ら筆をそめて大聖人に御供養なさる、しかも立正の二字をお書きになる、立正の二字は日蓮聖人の主張なり生命なりである、又我々日蓮主義者の命だ、それが勅筆によつて大聖人の御墓に下される、これは日蓮宗でもなく久遠寺でもない大聖人のお墓に下される、何宗何派を問はず、凡そ崇敬禮讃するものは、このお墓を忘れては濟まない、これまで宗門の各教團が各々自分の主張の下に相乖離して統一しなかつた、これは止むを得ん事情があつてさうなつたが、それはもう今日では過ぎ去つて居るから悉く一つにならなければならぬ、一度統合といふことも起つたが、各派の人が互に仲よくしようといふのであつたから意義が徹底しないのでお流れになつた、然し統合といふことは何處までも行らなければならん、唯その方法だ、それは外でない大聖人に集まるより外の方法はない、事實の上に於ては大聖人のお墓に集まるが一番よい、大聖人のお墓は世界中に唯一ケ所、『墓ヲバ身延山ニ建テサセ給フベシ』とある、そこで御廟は大聖人の御舍利が永久に鎭まります閻浮第一の靈地だ、その御墓があるから身延は尊い、ところがそのお墓の尊いことを忘れて、久遠寺の寺が尊いとか末寺が五十軒あるからとかいふからたう〳〵支離滅裂となつた、大聖人のお墓のある宗團は外にはどこにもない、

從つて大聖人のお墓といへば如何なる者もこれに集まらねばならん、昔は大聖人が命を捨て給ふた靈場には、各本山何派もなく守護寺を置いてゐた、ところがそれが長い間にグヅ〳〵になつた、そこでこの頃では各派が宗名を名乘るやうになつた。

日蓮宗、日蓮正宗、法華宗、顯本法華宗、本門法華宗、本妙法華宗、いろ〳〵な宗名を名乘るやうになつた、その宗名を名乘るといふ考へがもうすでに一つの宗旨でなければならん證據だ、如何となれば法華宗ならざる日蓮門下はない、本門法華でない日蓮宗はない、だから是は一つになる前提と見る、その前提の事實的立脚地は大聖人のお墓でなければならん、よつて今回　天皇陛下より直接大聖人の御廟に對して立正の勅額を下されたといふのは、何んと日蓮門下の者はこの日蓮の墓に集まつて一つになつたら何うだ、そして日蓮の精神の通りになつたらどうだ、めいめい欲張つてゐないで活きた佛法を弘めるやうに立正の宗教となつたら何うだ、そして安國の目的を達するやうにしたら何うだと、　天皇陛下が御催促なされたやうなものだ、これは法國冥合の前提として先づ法國感應の現はれだ、大聖人滅後六百五十年にして法と國とが感應して手を握り合つた、これからだ、これに魂を入れるのが三大秘法だ、その三大秘法を以て所謂

『天晴レヌレバ地明カナリ、法華ヲ識ルモノハ世法ヲ得ベキカ』

となつて、先づ國家を開會し、それから社會を開會し、それから人生を開會し、國家問題社會問題人生問題の解決をする、その王法と佛法とが團結して行かなかつたら、王法と佛法とすれ〳〵になつて佛法は佛壇の中に押込められ、此方では勝手なことをして居るのでは駄目だ、商人の算盤の珠の上にも佛法が宿らなければならん、百姓の鍬の上にも軍人のサーベルにも學者や政治家の頭にも、文學者のペンの先にも佛法が活きてはたらいて來なければならん。

『佛法ハ體ノゴトシ、世間ハ影ノゴトシ』

この正しい佛法によつて世間を照らし、佛眼をもつて國土を照し、この佛知見のレントゲンによつて世間法の一切を徹見するんだ、底の底まで見るんだ、骨の髓まで見るんだ、そして骨の髓から直して行くのだ、骨がしつかりすれば、血も清くなる皮膚も清くなる、そこで健康になる、

『此ノ經ハ則チ爲レ閻浮提ノ人ノ病ノ良藥ナリ、若シ人病有ランニ是ノ經ヲ聞クコトヲ得バ、病卽チ消滅シテ不老不死ナラン』

とある、若し人病があつても此の經を聞かないで居るから世の中は苦しみでうまつてゐるのだ、生活苦・人間苦・社會苦、經濟國難・政治國難・思想國難、なんたら國難、一切が國難だ、『是ノ經ヲ聞クコトヲ得バ病卽チ消滅シテ不老不死ナラン』、聞くとある、聞くから信を起す、信を起

すが故に持つ、けれども信の前提としては先づ此の法を聞かなければならん、聞くことが出來なければ何時までも入ることは出來ない、

『是ノ諸ノ罪ノ衆生ハ惡業ノ因緣ヲ以テ、阿僧祇劫ヲ過グレドモ三寶ノ名ヲ聞カズ』

とある、佛は

『我佛ヲ得テヨリ來（とのかた）、經タル所ノ諸ノ劫數、無量百千萬億載阿僧祇ナリ』

といふ、この本佛の反對は

『是ノ諸ノ罪ノ衆生ハ惡業ノ因緣ヲ以テ、阿僧祇劫ヲ過グレドモ三寶ノ名ヲ聞カズ』

佛も阿僧祇劫、此方も阿僧祇劫であるが、佛の阿僧祇劫は法華經の結果、此方の阿僧祇劫は惡業の因緣の結果で、同じ阿僧祇劫でも大變な違ひだ、それであるからこれを救はうとして時には涅槃を現じて慕はしめ、慕ふ心が出て來ると素直になる、

『質直ニシテ意柔輭ニ、一心ニ佛ヲ見タテマツラント欲シテ、自ラ身命ヲ惜マズ、時ニ我及ビ衆僧俱ニ靈鷲山ニ出ヅ』

といふことは御本尊だ、これは本時の娑婆だ、本國土妙だ、その本國土妙の現はれるといふのが御本尊だ、その現はれる場所は戒壇だ、よつて御本尊は閻浮統一の標識、戒壇は國家開顯の標幟、本門題目は人生の直接解決だ、だから個人問題・社會問題・世界問題のすべてを解決する、世間法は隅から隅まで活きて來ることになる。

◇

地獄でも餓鬼でもみんな成佛する、この久遠實成の大生命の功德の凝塊（かたまり）たる南無妙法蓮華經はいよ〳〵以て大事だ、世いよ〳〵闇なれば此の燈火はます〳〵大切だ、この王佛冥合一體の三大事は日蓮聖人によつて打建てられた、これを大成するのは未來だ、その責任は我々にかゝつてゐる、一人でも十人でも千人でも異體同心にして、何年かゝつても終に成就しなければならんといふ誓願、その誓願に我等の一生を終始し進退し策勵して行くから自分の力になる、それが我々の力となる、我々は斯くして力を得る、これ以上の安心はない、

『日月ノ光明ノ諸ノ幽冥ヲ除クガ如ク、斯ノ人世間ニ行ジテ能ク衆生ノ闇ヲ滅ス』

といふ、この本化大導師の慈願海中に生きて久遠の大生命を得るといふことは、卽ち現實の日本に出現された日蓮聖人、現實の印度に生れた釋迦如來の久遠實成の敎を日本國體の上に結び、世界問題の上に結んで我々人類の實生活を開顯された、これが生きた佛法だ、これより外の佛法を求めたら間違ひだ、卽ち王臣一同に三秘密の法を持つ、そこで横の觀察と縱の觀察と空間の觀察

と時間の觀察との會流點の中心が大切だ、これが人間に佛法の宿つた生命だ、そこでこの十字をかなふと訓じたのはそのわけだ。

十如是の十の字もかなふだ、かなふといふことはピツタリ一緒になることだ、一緒になつて働きを生ずることだ、こゝに力が生れ生命が發生する、こゝに諸の因緣が熟し果報が成就して娑婆卽寂光の現證が現はれる、

『天下萬民諸乘一佛乘ト成テ妙法ヒトリ繁昌セン時、萬民一同ニ南無妙法蓮華經ト唱ヘ奉ラバ吹ク風枝ヲ鳴ラサズ、雨壤ヲ碎カズ、代ハ羲農ノ世トナリテ、今生ニハ不祥ノ災難ヲ拂ヒ長生ノ術ヲ得、人法共ニ不老不死ノ理顯レン時ヲ御覽ゼヨ、現世安穩ノ證文疑有ル可カラザル者ナリ』

かういふ時代に到達する、その時代に到達することは、

『正直ニ方便ヲ捨テ、但法華經ヲ信ジ、南無妙法蓮華經ト唱フル人ハ、煩惱業苦ノ三道、法身般若解脫ノ三德ト轉ジテ、三觀三諦卽一心ニ顯レ、其人所住ノ處ハ常寂光土ナリ、能居所居身土色心俱體俱用無作三身本門壽量ノ當體蓮華ノ佛トハ、日蓮ガ弟子檀那等ノ中ノ事ナリ』

との日蓮聖人の教を信じて三大秘法に安心立命した者がこの果報をうける、然らば日本中の人、世界中の人にこの南無妙法蓮華經の洗禮を受けしめて、この大果報を得せしめてやらうといふのが佛の慈悲、成佛した働きだ、先づ一軒の家に信仰を受けつぐ者があつたら、その者から一家に及ぼし一村に及ぼし一國に及ぼし、やがて全世界に及ぼすといふ大目標の下に、一天四海皆歸妙法を自分の誓としてこれが爲に生き、これが爲に着、これが爲に食ひ、これが爲に子を生むのだと考へて行けば、我等人生の一切は皆久遠本佛の所作佛事となる、佛の仕事となつてしまふ、佛の仕事以外に成佛はない、それより外に信心の必要もない、佛になつても金ピカになる必要はない、我々の體はこのまゝで可い、人民は人民、君主は君主、國土は國土、智者は智者、愚者は愚者、その儘で內容が一つの法華經になつていけば法界の成佛がこゝに現はれる、卽ち國家の成佛がある、國家と共に成佛するのでなければ我一人の成佛はない、我が身一人のことについて諸天善神を煩はすことはしない、我が身自分だけのことは自分の過去の業報によつて營んでいかなければならない、それを自分に持つて行かないで法の爲め國家の爲めとして立てる誓願、その爲の自分ならばこれは無病息災でなければならん、金も氣力もたんとなければならんからとの意味に於てこそ諸天善神に法の爲の故に護れと催促する、日蓮聖人は諸天善神に對して『御誓空シカラン』と御催促は申したが自分の勝手のことについては願はない、また我身死んでの後地獄に墮ち

るとか、餓鬼道に墮ちるとか、それは構はない、それはお任せ申す、我は今此の世の中に於て即身成佛し、この現世に於て常寂光土を建設するのであるから、死んでから後の事は構はない、現實の世の中に於て凡夫を佛にするとなれば、凡身にはこれ以上の成佛はない、未來の成佛とか我が身の無病息災とか、甚だしきに至つては無盡に當てゝくれろなんて拜む者がある、無盡なんかは籤が當らなければ決して當らない、宗教を籤のやうに思つてゐる、そんな宗教を宗教といつてゐるから宗教打倒運動が可い鹽梅に起つて來る、そんなヒョロ〳〵した間違つた佛法などは、との宗教打倒運動によつて潰して貰つた方が可い、『ホヤ、ランプ、ギヤマンのとはれはありませんか』といつて來る者に買つてもらつた方が可い、本當の佛法、釋尊の生命を宿した佛法、その釋尊の生命が我等の生命に接續する眞の佛法こそ本當にこの世を救ふ大利益のあるものである。

マルクス主義の主張と正反對なるものは宗教だ、だから一體今日以後の思想界は宗教と反宗教これなんだ、その宗教と反宗教との對立だ、然し宗教といつても宗教の名を持つてはゐるが間違つたものが幾らもある、通用期限のきれた紙幣も澤山ある、さういふものは此方で探し出して骨を折つて片づけなくても、マルクス主義の者に片づけてもらふ、日蓮聖人は七百年の昔打倒宗教運動を起された、それがまた再び燃えてさういふつまらない宗教が惰力の間に生存して居る、さういふものは時の流れ、時勢の力にまかして處置してしまふ方がいゝ、唯獨り眞の生命に入眼するところの本當の宗教はこれから後必要だ、その中心をあかした法が法華經だ、法華經の中心は壽量品、壽量品の中心は事の三大秘法、事觀の妙法・一念三千の極理、これが王法佛法冥合の原則だ、

『法華ヲ識ルモノハ世法ヲ得ベキカ』

法華を識り世法を得て而して國が安泰になる、この順序によつて立正安國の大業は本化上行菩薩の大活斷によつて、昔話でなく、末法の今日現實に我等を指導し解決する爲に、まざまざとして活きて働く佛法として殘されたものである、即ち我々の生存の前に横たはるところの生命の大いなる流れだ、これをつかんで行かなければならない、あてづつぽうの横道にはいつてゐることは殘念である。

『大千ノ經卷函ニ滿ツレドモ、徒ラニ高閣ニ束ネテ、唯瞑目ニ至ル』

と故人もいつた、醉生夢死である、何の爲に生れて來たんだか、何の爲に生きて居るんだかわからずに空々寂々としてこの世を終つて、唯三度の飯と一度の糞ばかりで、この世に生れて來たとすれば、人間は下らないものになる、それよりはその偉大なる精神の力を發揮して、このいふに

いはれない妙法の味を味はつて、『色香美味皆悉ク具足セリ』といふとの藥を味はつて、不老長生の命を完うするといふことを我等の出世の本懷としてこゝに向ふ、それが事業となつて、その信仰が事業化するので願業生活となり、一天四海皆歸妙法の仕事となつて來る、この仕事が我等の一生を導く、かういふ強い牽引力によつて我等の生は一大事業となる、それを明らかにしたのが『事の三大事』の法門である。

（をはり）

人生徹底解決の鍵

出版會承認イ290074號

會員番號119505番

著者印檢

昭和十八年十二月二十四日印刷
昭和十八年十二月二十七日發行（三千部）

定價壹圓六十錢
特別行爲稅相當額六錢
合計壹圓六十六錢

著者　田中智學

發行者　鹿山實　東京都下谷區上野櫻木町一

印刷者　肥後盛武　東京都牛込區榎町七

配給元　日本出版配給株式會社　東京都神田區淡路町二ノ九

發行所　東京都下谷區上野櫻木町一　天業民報社　振替東京五三九九三・電根岸九二

印刷所　大日本印刷株式會社工場（東東1）榎町

966
246

終

定價(税込) ￥1.66